

浄土宗のみ教え

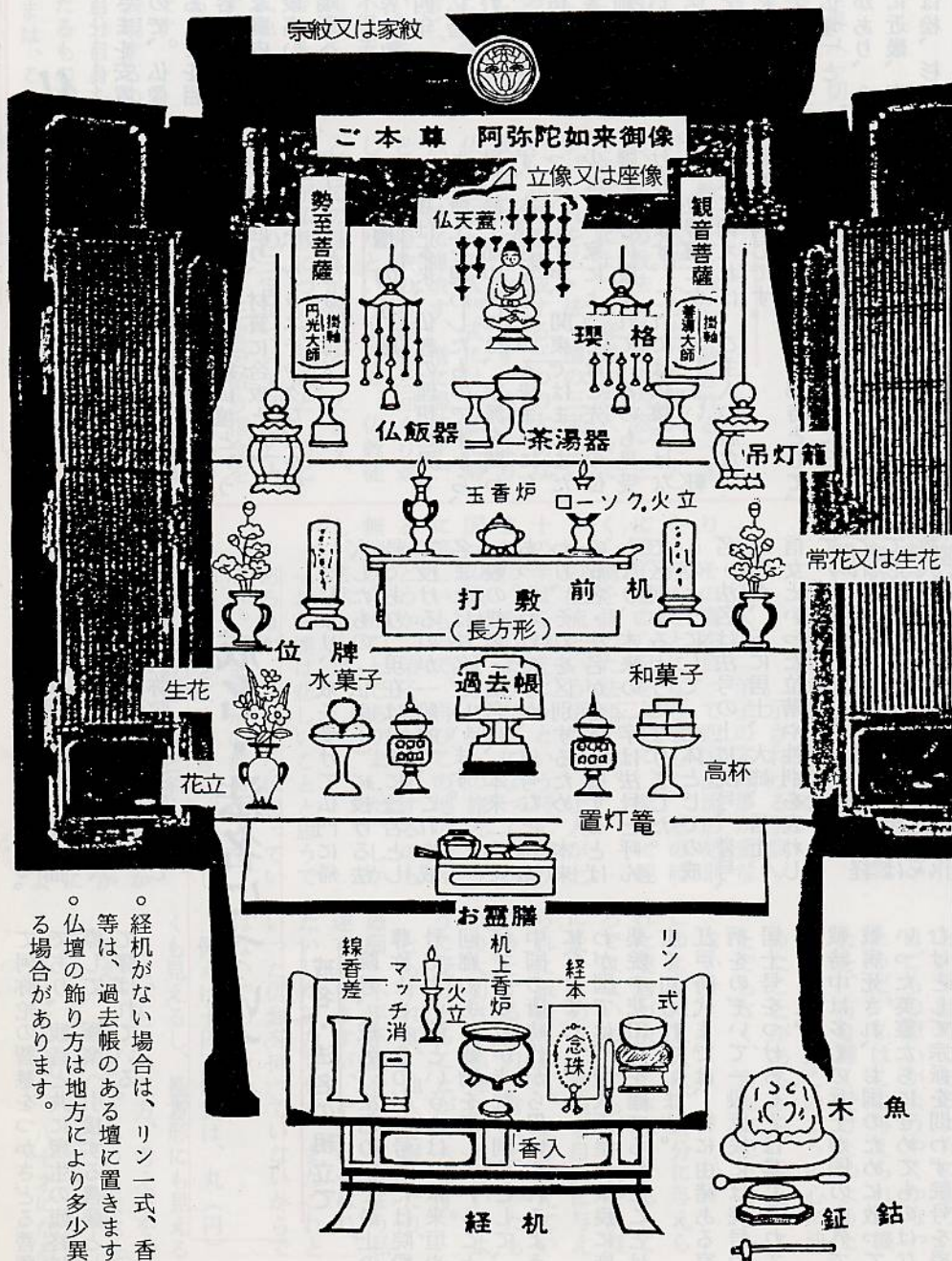
③

宗紋



丸に抱若荷

浄土宗のお仏壇の飾り方



。経机がない場合は、リン一式、香炉等は、過去帳のある壇に置きます。
。仏壇の飾り方は地方により多少異なる場合があります。

お 仏 壇

仏壇はもともと本尊さまを安置する為に設けられたもので、仏像や祖先の位牌を安置することを目的とし、単なる位牌の容れものであつてはならない訳で家庭内の他の家具や調度品より一段高い場所で「壇」になっている場所へお祀りするものです。

この壇は、仏さまの世界を象徴しており、天武天皇の十四年（六八六）「諸国の家ごとに仏舎（今の仏壇）を作り、敬い拝むよう」といわれたことに始まり、家ごとに仏壇を設けさせるには色々な意味があります。最も大きな理由は「家庭における子女の訓育」が目的であつたようです。いわゆる子女の宗教的情操を育てると同時に祖先崇拜の感情を養うことに中心がおかれ家庭教育が常に仏壇を中心に為されていたようです。

仏壇の種類には「金仏壇」と「唐木仏壇」の二種類があり、金仏壇は主に関西を中心に近畿、東海、北陸に多く、材質は松、杉などに漆塗りの金箔がほどこされた美しい技巧をこらしてあります。

唐木仏壇は、関東中心に祀られていて、桑、カリン、クルミ、桜、

タガヤサンなどが主な材料で、地味ではありますが、どっしりとした生地の輝きが特色です。

その他に、現代風な新仏壇というのも出回り、材質に合板とかアルミニウム、プラスチックなどを使用したものがあります。

仏壇の壮厳

仏壇は本来、仏教の理想世界である浄土を現わしたものですから、段の最上部中央には、宗派を問わず、本尊さまをまつる決まりになっていますが、関東ではまだまだ少なく、家によっては先祖の位牌が中心に置かれているのも見受けられます。これでは仏壇ではなく、位牌壇になってしまい、一軒の家に例えれば、ご主人の居ない家庭と同じです。

浄土宗では阿弥陀仏の脇侍として、観音菩薩と勢至菩薩を従えた三尊仏を安置した型のものと、両側に善導大師と法然上人を配したものがあり、どちらにも立ったお姿（立像）と坐った状態（坐像）があります。

観音菩薩―大慈悲をもって衆生を救済することを願いとし、諸菩薩

のうちで最も広く崇拝されている。観音さまは姿を聖、千手、十一面など三十三身に變化して法を説くとされている。

勢至菩薩―阿弥陀仏の右脇侍とし

戒名・法名について

はじまり、戒を受けて仏門に帰入したもの（仏弟子）に授ける法号であり、現在は没後に諡名として授けるのが一般的で、これを戒名または法名といいます。

一般の戒名・法名は、本来二字であつたわけですが、道号などが加わり、それを区別するため、本来の戒名・法名が全体を指すことばとなり、本来の二字は法号と呼んで区別するようになりました。

このようにして、全体としての戒名・法名は法号の上に院号、誉号、道号が、下に居士、大姉、信士、信女といった位階や性別を表わしています。

これらはいずれも、長い歴史を経て形成されてきましたが、現代は故人の生前の人柄や、信心が深いか浅いか、職業や趣味等も考慮され付けられるようになってきてお

て阿弥陀の智慧をつかさどる菩薩であり、観音と共に衆生の臨終に際して、極楽へ引接する菩薩として尊ばれている。

戒名・法名の組立て

院号、戒名、法名の中で最上の尊称とされるのが院号または院殿号です。院というのは、本来垣や回廊のある建物を指していることばで、これが寺院の別称として、中国の唐時代から用いられるようになりました。

わが国では、聖武天皇が奈良に施薬院や悲田院を建てられたことは広く知られています。

江戸時代までは、特に由緒ある家柄をのぞいて一般庶民には院号や居士号をつけることは禁じられていました。

戦時中では多くの兵士が国の内外で戦病死され、お国のために散つていった英霊たちにせめてものはなむけとして宗派を問わず院号を授けました。

今日では社会的な貢献度や、特に信仰の篤い人、寺門功労者にも広く授けられるようになりました。

日常生活の中の仏教用語

四苦八苦

この世はすべて苦の世界（一切皆空）であるとお釈迦さまは説かれました。人生において悩みや苦しみの根本の原因を四苦八苦という言葉で表わしています。四苦とは生（生まれる苦しみ）、老（老いゆく苦しみ）、病（病気にかかる苦しみ）、死（死ぬことの苦しみ）をいい、人間として生を受けたからには避けることのできない苦しみです。この四苦に、愛別離苦（親や子と死別するとういうように、愛する者と別れる苦）、怨憎会苦（にくしみあっている者と会わねばならない苦）、求不得苦（欲しいと思っても手に入れることのできない苦）、五蘊盛苦（身・心・想・行・識）が、成長するにしたがって盛んに生じてくる苦）の四つを加えたものが八苦です。

普通、非常な苦しみを表現するのに用いられていますが、自分自身を省りみたときに思いあたるものばかりです。お釈迦さまは、この

現実の苦と、この苦の原因を知りこの苦をいかに乗り越えていくことが出来るかということに心をそがれたのです。

さんぼう

仏教徒にとって尊敬されるべき対象は、仏陀（さとりを開いた人）と、仏陀の教法（教えの内容）とその教法によって修業する人々です。これを仏・法・僧の三宝といひ、仏教を構成する三つの大切な要素となっております。古くより仏教教団への入門式には「仏に帰依す、法に帰依す、僧に帰依す」という三帰依の言葉を三回くり返して誓われたというように、仏教徒としての基本的条件といえます。

私達が仏教について知るといふことは、この三宝について知ることであり、心より三宝を敬う信念を養うことでもあります。このことは現在仏教の各宗派が行なう儀礼の中には必ず取り入れられておりまして、聖徳太子が、「篤く三宝を敬え」（十七条憲法）を言われた教えはよく知られております。

源空の遠流

法然上人のご法語

源空が遠流を蒙ること、辺土の化縁すでに熟せり。誠によるこぶ所なり、普く万機を教化して念仏門に入りしめん。

△御流罪の時、門弟に

示されける御詞▽

法然上人は、弟子の不祥事が重なり、その責を負って四国配流の処罰をうけることになりました。その時に弟子達の心配をよそに、配所に趣く心境を語った法語です。

その配流という事件は、上人が七十の半ばを越えようという時に起りました。そのような年になっての四国への旅は、まさに死への旅というに等しいもので、再びこの地で会えるかどうか、弟子達が心配するのも無理からぬことでありました。しかし、法然上人は、

「お前達は悲しいことと思うであらうが、私はそうは思っていない。今まで京の都に住んで、念仏の教を広めてきた。しかし私はこの教をもっと多くの所、多くの人々に教え伝えたいとかねてより考えていたが果せなかった。このたびの配流は、私に他の土地へ行って教えを広めよ

という勧めであるように思う。

日ごろの思いがようやくかなったのだ、私はこの与えられた機会を、有り難く受けとめようと思う。私にはこのように心に決めたことがあるから、悲しいことでもなく、哀れに思うこともない」

このように上人は、自分に与えられた境遇が決して本意とするところではないにしても、それを素直に受けとめて、逆境を自分に与えられた試験として、乗り越えていこうとする努力、信念といったもの大切さを私達に教えているように受けとることが出来ます。

ともすれば、他人を恨んだり、愚痴・不平不満をいってしまう私達であります。それはやはり、たいした努力もせず、またこれといった信念を持っていないからではないでしょうか。

例えば十円玉銅貨は、丸（円）くも見えるし、長方形にも見えるように、ものの方、考え方を少し変えてみるという心の柔軟性をもつことも大切なことです。七十五才を超え、八十才になる

うという法然上人の、四国への流罪の旅は、大変な苦勞であったと想像されるのですが、それでも行く道々で漁夫や遊女に教を説いて教化しながらのものであったと伝えられております。

「たとえ死刑に行なわるとも、

この世の終りに

この世の祈りに、仏にも神にも申さんことは、それもくるしく候まじ、

後世の往生、念仏のほかに、あらめ殊をこそ、念仏を妨ぐれば、あしきことに候え、この世のためにすることは、往生のためには候わねば、仏神の祈りさらにくるしかるまじく候なり

(津戸の三郎へつかわす御返事)

日本人は、正月は神社へ初詣、結婚式は神前、教会で、葬式はお寺で、そして十二月には、クリスマスをし、大晦日は除夜の鐘を聞くというように、日常生活の中で宗教に対して多種多様に対応しています。そういう意味でこの法語は現代にもそのまま通用するものです。

このこと(だれもが念仏を称えること)によって阿弥陀仏の極楽浄土に生まれることができるという教え(いわずばあるべからず)

と言いつつ法然上人の強い信念があればこそできたのです。

この間の質問者は、津戸三郎といい、もとは関東の武士で源頼朝の御家人でありました。後に法然上人に深く帰依して念仏にはげんだ人です。

「世間の人は、くらしの中で善いことがあっても悪いことがあっても神社やお寺にいつて、手を合わせ、願をかけたりにしている。私は上人の導きにより、阿弥陀様の教を信じて念仏申してくらしているが、そのような私とをしてもよいのでしょうか」この間に法然上人は次のように答えておられます。

「阿弥陀仏の浄土へ往生しようというのであれば、一心に念仏を申すことが一番肝要なことであり、それだけでよい。他のこ

配流の途中經の島にて諸人に説法される法然上人



とは必要ない。

しかし、この世の中で生活していく上での習慣やしきたりの中で、他の仏や神にお詣りすることは一向にさしつかえないことである。他仏といえども、同じ源からの仏教であり、それを非難することは自らも否定することになってしまう。また神に祈るといふことも、遠い昔より伝えられたものには、それなりの理由、意義があり、それを非難することは当を得たものとは得えない。守るべきものは大切に

扱うべきである」

このように、ここではまず自分の立場、自分の信仰が何んであるかを知ることが大切であることを示されております。

後生を、阿弥陀仏の浄土に往生したいと願うならば、阿弥陀仏の名を称えなさい。

現世での日々の生活には、それぞれルール・習慣があるから、それを守って生活することが大切である。

しかして現世での生活は、念仏を修しやすい方向に持っていかなばならぬ、日常生活が乱れていけば往生を願うという思いは相続しないことになるであろうと申されているのです。法然上人はまた、「現世を過ぐべく様は、念仏の申されんように過ごすべし」とも言われております。念仏をして浄土に往生したいという大きな目標をしっかりとっていけば、他仏・神を大切にすることは、かえってそのための手助けとなります。しかし、猿が木から木へと飛び移って行くように、罪悪生死の凡夫といわれる私達の心は、ちよっとしたことで、大きく揺り動かされ、まどわされやすいのですが、この不安定な心に阿弥陀様を頂いて安心の毎日を通したいものです。